

思い出すままに

江 口 修

Le coeur a ses raisons que la raison ne connaît point : on le sait à mille choses.

B. Pascal

小樽に来ることになったのは28歳になったばかりのこと。当時の文学部では博士課程を「満期退学」して就職することはまだまだ稀であり、出身の専攻では私が初めてであった。10月赴任で、いきなり学会をやらされたほかには補習の一コマ以外に授業を受け持つことはなかった。先輩の先生方からは「半年の準備期間を貰ったと思って取りあえずは小樽の冬に備えなさい」との励ましを頂いた。だが仙台で10年過ごした者にとっても北海道の冬、そして小樽の雪は想像以上に厳しいものであった。論文の締め切りがあってストーブを焚いたまま朝方やかんの水を足そうと水道をひねったところ出てこない。雪でも溶かして凍結を戻そうと思って外を見ると信じがたい高さにまで雪が来ているではないか。おっかなびっくりストッパーのついた長靴を履いて大学へと歩き始めたが、降り積もった雪の下は水で何度転んだかわからない。地獄坂を滑るように下りて行く商大生たちがまぶしく見えたことは言うまでもない。そんな私も今では普通にスキーをやるが、当時の商大のスキー狂の先生たちはというと、天狗山をスキーを担いで登りご自宅まで下りてこられるというのが当たり前だった。ともかく、天狗山の山頂からの滑走は昼も夜もなかなかの醍醐味である。

赴任当時は一期校二期校制度の最後で、共通一次試験に向けての準備が進んでいた。その後大学は様々な改革に振り回され続けてきた感があるが、法人化にいたるなどとは当時では想像すらできなかった。だが昔からときおりまことしやかに、廃校候補としての小樽商大という噂が流れた。そんな噂も

ものかわ、創立100周年を記念し生き延び続け、最近では大学再編の優等生との評価もあると聞く。北海道というのは不思議なところで、共通一次以後全国的には小樽商大のいわゆる偏差値的な評価は下がる一方の印象があるが、入学したての学生たちとフランス語の教室で付き合いしてきた限りでは昔と遜色ない者たちがいる。のんびりと育て、地力はありながら受験レベルでみると成長しなかった者たちが結構いてそのまま商大に入ってきてくれるからだろうか。変わったのは女子が増えたこととその多様になったことだ、ときどき屈託がないといえばそうなのだが、馬鹿笑いにどきっとさせられることがある。

さてそのフランス語だが、最近の外国語教育の状況を見ると、先行きに不安を抱かずにはいられない。いつどこで議論して決定されたのか分からないうちに、グローバル化の名の下に英語の小学校での教科化や大学での英語での授業推進などが進んでいる。これではどこかの国の「準州」になることを目指しているのではないかと目を疑いたくなる。だがもっと深刻なのは日本語のバックボーンが衰えてきていることだ、かろうじてセンター入試や一部国公立大学では二次試験で課してはいるが、「漢文」がほぼ学生たちの頭から消滅しかかっている。我々の教養のほとんどが日本語・日本文化であり、ラテン語を持ち出すまでもなく、その背骨の大きな部分が東アジアの漢字文化であることは言うまでもない。文学部はフランス語では*faculté des lettres*でありレットル（英語ではもちろんレターズ）は「文字」のことであり「手紙」ではない。学問の成立には「文字文化」の成熟が欠かせないことはもちろんだが、「教養」もまさに「文字文化」の上にたちその多様性を享受する能力なしには身につくわけではない。欧米人にとってラテン語は我々にとっての漢字文化であって、さらにいえば非英語話者にとって英語の習得は馴染みのある「教養」のひとつであり、実用とそのまま繋がって違和感はない。日本は文明開化というとんでもなく困難な道を選んだ。異質な「ラテン語圏」文化から生じた英・独・仏という先進三カ国から直接近代西洋文明を摂取しようとしたのだ。だが研究で詩に親しむにつれ我々の言葉は漢字文化圏で鍛

えられその中から花開いてきたという確信を深くする。その上にさらにラテン語文化圏に挑戦したのだ。もちろん言語学的には英語・ドイツ語はラテン語との関係は薄い、しかし中世ヨーロッパの歩みを見るまでもなく宗教・学問的普遍性を支える文化的基盤としてのラテン語とその文化あってこそ現在があることは誰も否定しないだろう。経済合理性からすれば、そんな途方もない努力を国民に強いることは無理だし、「せめて英語だけでも」という選択は合理的に思える。しかしだからといって日本語・日本文化の独自性とその歴史を無視することは自殺するに等しいのではないか。「文字」は逃げはしないのだから、できる限り多様な「文字文化」にアクセスできるようにしておくのは決して無駄ではないし、本学のモットーのひとつである品格は多様性と触れる中で涵養される「寛容」なしには生まれてこない。

研究では忸怩たる思いが強い。緑丘会から若手在外研究への支援が始まり、幸運にも採用されて1986年から一年間研究留学することができた。本学にも講演に来て頂いたランス大学のイヴォンヌ・ベランジェ教授のお蔭でDEAを免除していただいて課程博士に直接登録することができたが、やはり準備不足というか一年では論文を完成させることはできずに帰国することとなった。「外国人のお前が普通に仕事しながら仏文の博士論文を書くのは余程頑張らないかぎりは無理だろうね」という教授の言葉どおり、言語センターの設立や国際交流など目まぐるしい改革に携わったこともあって、博士号獲得は夢と終わった。博士論文のテーマは「フランス・ルネサンス詩におけるイマジネールの在り様」といったものだったが、大学院時代に研究対象としたシュールレアリスムについてもフロイトが発見した無意識の新大陸開拓という側面からとりかかったのだが、ここでもイマジネールこそが無意識の独自の運動との連動から人間の心のある意味解放していくのではないかとの問題意識を抱いていた。ルネサンスではもっとプリミティブな形ながら、規範に縛られた世界観を打ち破る力動性としてイマジネールがあっただろうという観点から、具体的な言語活動の再検証を行った。これは若き日に感動した花

田清輝の『復興期の精神』がその原点にある。ソシユールが明らかにした、個の言語活動であるランガージュと規範として堅固な構造を備えた国語すなわちラングとの相克にあって、規範性を破る方向に進むのがイマジネールの世界であり、そこは換喩的な逸脱が横溢するパロールの世界でもある。フランス・ルネサンスの世界では科学的思考が確立されると同時にパロールの祝祭が繰り上げられるイマジネールの優越が生じた。やがて逸脱は粛清されることとなりラングが再び支配権を握る17世紀がやってくる。

最後に、本学創立百周年に刺激されたのかどうか、戦前から本学どころか北海道のフランス語教育を大黒マチルド先生と二人で支えた松尾正路先生のお言葉、「実は僕の兄は新聞記者をやってましてね」がふと気になって調べ始めた松尾邦之助に関する研究について触れておきたい。1920年代から第二次世界大戦終結まで長きにわたってパリに住み、民間駐仏日本大使との異名をとった邦之助は、藤田嗣治との名コンビもそうだが、在パリのそしてほぼ一月の船旅を厭わず押し寄せる日本人とあらゆる領域の仏人たちとを縦横に結んで、まさに狂乱の20年代を日本人としてみごとに体現した人物であった。ジャーナリストとしてもそうだが、日仏両文化の相互紹介はまさに八面六臂の活躍というべきで、百年の時を越えてもっと再評価されていいのではないかと思っている。エピソードをひとつ紹介しておこう。日本における私鉄経営のパイオニアである小林一三は宝ジェンヌたちの生みの親であるが、宝塚少女歌劇団が自慢の一三もパリで松尾に連れて行かれたキャバレーでのレビュー（ラインダンス）にはど肝を抜かれたらしい。聖俗それぞれ広く深くパリを知っていた邦之助の案内がなければわれわれの楽しみのひとつはこれほどまでになっていなかったかも知れない。

小樽商大で過ごした36年余、考えてみると商大の歴史のほぼ三分の一に関わったことになる。そしてワインを傾けながら思い出にひたるとき、お付き合い頂いた同僚、職員の方たちの顔が走馬燈となって次々と浮かんでくる。フランス語の教室も随分と変わった。学生気質もどんどん変わっていく。だ

が緑丘の佇まいは変わらない。そうしたすべてに感謝を捧げ、このつたない一文を締めくくりにしたい。